展観によせて(1)

色絵花鳥文盃　ルイス・フィクトール作

オランダはヨーロッパの一小国ですが、建国以来海外に雄飛して17・8世紀ごろの経済的繁栄はめざましいものがありました。鎖国をしていた江戸時代の日本が、オランダを通じて西洋の自然科学や絵画などを受容したことについては、言うまでもありません。

一方、東洋貿易を独占していたオランダ東印度会社の扱う輸入品として、中国や日本の陶磁器がありました。世界工芸の精華とたたえられる中国の陶磁器は、古くからヨーロッパにおいて珍重されてきましたが、17世紀半ば（江戸時代前期）になると、ちょうど色絵磁器の技法を完成したばかりの日本の有田焼（伊万里焼）が、オランダ船により多量にヨーロッパ市場に現われるようになりました。東洋からはるばる運ばれてきた陶磁器は港町のデルフトに陸揚げされ、やがてヨーロッパの各地へ散っていきました。

このデルフトは同時に窯業においても有名で、16世紀末ごろから特徴のある白い錫釉を用いた陶器を焼くようになり、17世紀に入ってから陶器の町としての最盛期を迎えました。デルフト陶器では、錫釉の白地に藍色の染付や華やかな色絵で文様を施したものが多く東印度会社によって輸入された中国や日本の陶磁器を模倣したものも沢山作られました。一方、江戸時代の日本ではデルフト陶器の異国趣味が喜ばれ、オランダ商人に懐石道具を注文して、逆に輸入するということもありました。

ここに写真をお見せする「色絵花鳥文盃」は大きさとかたちからみて、日本から注文した酒盃ではないかと思われます。大変面白いのは、白地の上に施された色絵の花鳥文様で、これは日本の「梅にうぐいす」文様を表わしたものでしょう。ところが、デルフトの陶工は日本についての詳しい知識を持っていなかったので、うぐいすはまるでインコかオウムのようで、梅の花も牡丹くらいの大きさになってしまっています。

この盃の底面には青い文字で「LF」とサインがありますが、これは17世紀の半ばから18世紀初めにかけてのデルフトの名工、ルイス・フィクトール（Louwys Fictoor）の頭文字と推定されるそうです。

この盃は大へん小さなものですが、江戸時代における日本と西洋の工芸の交流について、多くのことを物語ってくれると申せましょう。（成瀬不二雄）

色絵花鳥文盃／18世紀

高台底（銘文）

季刊 美のたより No.45
昭和54年1月5日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.